

ベンチャー起業論で人材育成 —人生の経営者になる—

大学の講義に興味を持てなくて目標を見失っていた学生が、あるシンポジウムに参加した直後から、さまざまな活動に精力的に取り組むようになった。これをモデルに、経営者による講義とビジネスプランコンテストを幹にした「ベンチャー起業論」が始まった。

■起業家育成教育のきっかけ

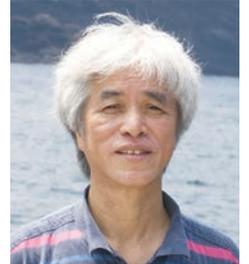
私は、1999年に福岡大学で「ベンチャー起業論」という講義を通して起業家育成教育を始めた。この講義を開始するきっかけとなったのは、その前年に当時の通商産業省による「若者会社をつくろう」という全国縦断シンポジウムを福岡大学でも開催することになり、たまたま私がそのコーディネーターになったことだった。

このイベントに参加した一人の学生は、それまでの大学の講義に興味を持てなくて、目標を見失っていた。ところがシンポジウムに参加した直後から変身した。地元経営者を呼んで「若者会社をつくろう」という講演会を毎週開催しただけでなく、フクオカベンチャーマーケット協会（現 福岡県ベンチャービジネス支援協議会）のビジネスプランコンテストに応募し、当時、学生としては初めて発表するまでになった。夢に向かって目を輝かせて精力的に活動するこの学生の変身ぶりに驚いた私は、この学生の活動をモデルに、魅力的な経営者による講義とビジネスプランコンテストを主なコンテンツにした「ベンチャー起業論」をスタートすることにした。

起業家育成教育とはいうものの、受講生約300人のほとんどが起業しようと思っているわけではなく、できれば大企業に就職するか公務員になることを目指している。経営者になりたいと思っている学生だけでなく、公務員希望の学生にも支持してもらえようような講義は、どのように設計すればいいのだろうか？

このような悩みから行き着いたのが、「人生の経営者」というキーワードである。たとえ経営者になりたくないという学生でも、「自分自身の人生の経営権を他人に渡していいのですか」とか「進学、就職、結婚、育児などの人生における重大な選択に際して、他人任せにしていいのですか」という質問をすると、皆、「嫌です」と答える。しかし、「なぜこの大学に来たのですか」とあらためて聞くと、「偏差値が」「担任が」「親が」などと答えるとともに、答えた後に自分が決定権を放棄してきたことに気付く。この講義では、まず学生に「自分自身が意思決定の主体である」ことを確認させ、「選択」することの喜びを実感させることを目的としている。

この稿では、まず、学生が意思決定の主体であることを自覚する組織づくりに



阿比留 正弘
あびる まさひろ

福岡大学 経済学部 教授

ついて述べ、次いで、この講義のゴールであるビジネスプランコンテストについて述べる。そのあと、これに対する学生の反応について、最後に今後の課題について述べる。

■ 学生主体の組織と運営

私が学生を指導する中で一番大切にしていることが優先順位である。私は最近よく学生に「あなたにとって一番大切な人は誰ですか」と聞くようにしている。その答えとして「それはあなた自身です」と私が言うと、一瞬驚いた顔をする。特に何もなければ、その次に大切な人は両親、そして兄弟、親戚、友人、地域の人と広がっていくはずである。

悩みを抱えている学生の多くは、自己重要感に問題を抱えており、自分を大切にしていない。漠然と他人の目を気にしながら、息を潜めて生きているように見える。その結果、元気がない、何を考えているか分からない、といったネガティブな評価を受けている。自己重要感に目覚め、優先順位が明確化すると学生は大きく変身する事例を多く見てきた。「ベンチャー起業論」の活動の中でリーダーを経験すると、日常的に問題に直面し、問題解決のための「選択」をしなければならない。このような理由から、できるだけ多くの「大変身」を見るためには、できるだけ多くのリーダーを作らなければならない。このような要求から学生主体の組織が生まれた (図 1) *1。

* 1
ベンチャー起業論の組織についての詳細はベンチャー起業論のウェブページを参照されたい。
<http://www.venture.econ1.fukuoka-u.ac.jp/about.html#management>

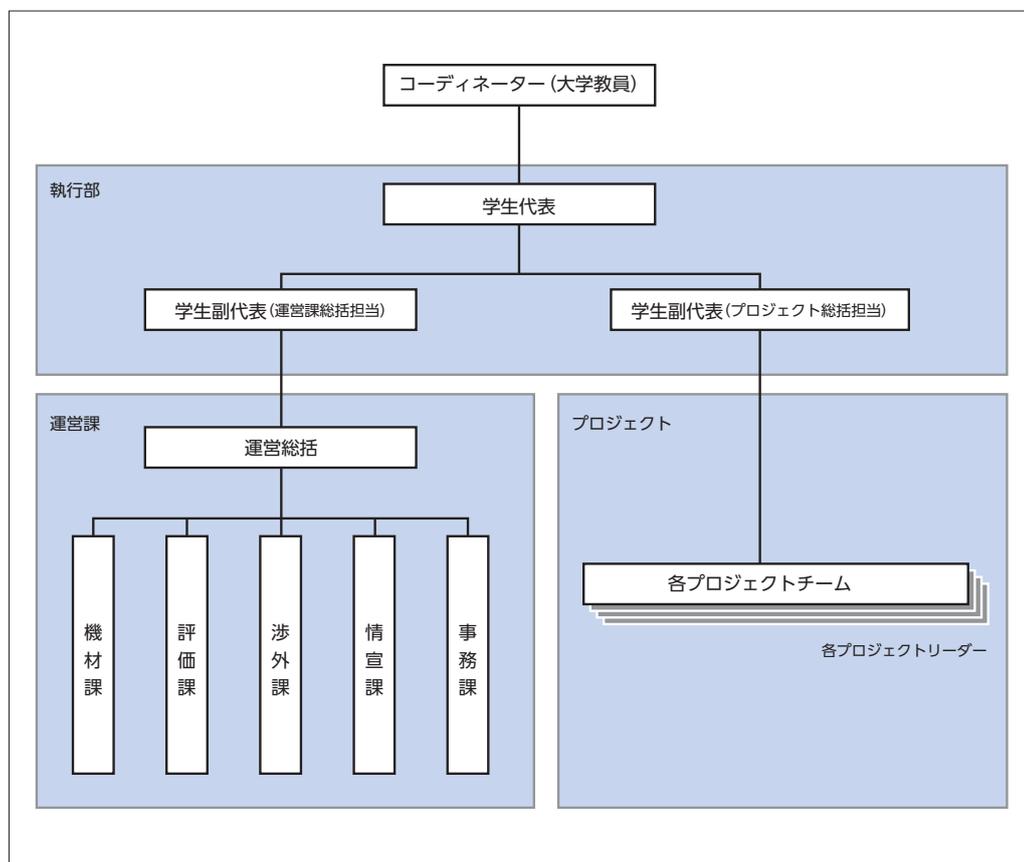


図 1 「ベンチャー起業論」の組織構成

「ベンチャー起業論」のコンテンツは魅力的な経営者による動機付けのための講義^{*2}と、ビジネスプランコンテストをゴールとするプロジェクト活動から成る^{*3}。この二つの活動を学生主体で行っている。頂点に立つのは「学生代表」である。この下に二人の学生副代表がいて、講義運営とプロジェクトの統括をしている。

講義運営は運営総括の下に機材課長、評価課長、渉外課長、情宣課長、事務課長がいる。機材課は、講義やビジネスプランコンテストにおけるパソコンやプロジェクターの準備に責任を持つ。渉外課は、講師の先生が講義に際して準備される資料の確認、印刷、配布などに責任を持つ。情宣課は、前期と後期の最後に開催されるコンテストの告知や集客のためのウェブページや Facebook ページの更新などに責任を持つ。事務課長は、ビジネスプランコンテストに必要な物品の発注や、学生のインターンシップ先への交通費の申請などの事務作業に責任を持つ。評価課は、「ベンチャー起業論」が試験なし科目であるため、私が試験なしで学生の成績評価をする（図2）のに必要なデータの収集を手伝う役割を担っている^{*4}。



図2 「ベンチャー起業論」の評価基準

このように「ベンチャー起業論」の組織は企業とかなり類似した組織になっている。企業は一般的に収益を得る活動（営業）と管理部門から成っているが、上で述べた運営総括は管理部門に相当し、私のゼミ（阿比留ゼミ）の学生が主に担当している。企業で営業が果たしているのと類似の機能はプロジェクト活動で、300人すべての学生が約20のプロジェクトに所属することになっている。このプロジェクト活動が「ベンチャー起業論」の最も重要な活動であり、次に述べるニュービジネス協議会主催の大学発ベンチャー・ビジネスプランコンテストに出場することをゴールとして活動している。

■ビジネスプランコンテストとオリジナリティー

2001年から始まった大学発ベンチャー・ビジネスプランコンテストの第1回目には、学生たちに呼び掛けて50件近く応募させたが、全員、予選を通過することはできなかった。大学発ベンチャー・ビジネスプランコンテストの審査項目

* 2

ベンチャー起業論はベンチャー起業論とその関連科目の総称である。
<http://www.venture.econ1.fukuoka-u.ac.jp/about/course.html>

* 3

プロジェクト活動について、以下を参照されたい。
<http://www.venture.econ1.fukuoka-u.ac.jp/projects.html>

* 4

ベンチャー起業論の評価方式の詳細は、以下の説明をみられたい。
<http://www.venture.econ1.fukuoka-u.ac.jp/about/evaluation.html>

では、オリジナリティーと実現可能性が要求されるが、大学生には、この二つの条件を同時に満たすのは不可能であるとの結論に達した。「ベンチャー起業論」のビジネスプランコンテストでは、企業へのインターンシップも重視するが、企業の理解を最重要視することとし、問題発見と問題解決を目指して、ビジネスプランのオリジナリティーを捨て「守・破・離」を徹底することにした*5。私は、この判断は間違っていないかと思う。

現在、日本中でさまざまなビジネスプランコンテストが開催されているが、オリジナリティーを捨てたビジネスプランコンテストは他ではほとんど聞かない。しかしながら、現在日本で成功しているビジネスモデルをみると、ほとんどがオリジナリティーのあるものではなく、米国から導入し、改善したものであることに気付く。学生が企業を訪問し、経営者の創業の苦労話、社員、取引先、顧客の反応などについて独自の取材を行う中で問題を発見し、その問題を解決することを通して、企業の改善提案を行うのが、私たちのビジネスプランコンテストである。あえてオリジナリティーを捨てたことにより、オリジナリティーに溢れるビジネスプランコンテストを実現することができた。

* 5

ベンチャー起業論における守破離の詳しい説明は、以下の論文に譲る。阿比留正弘. 学生と留学生のネットワークによる企業の海外進出 (Breakthrough プロジェクトの挑戦). グローバル人材育成教育研究. 2014, vol. 1, no. 2, p. 13-20. http://www.j-agce.org/wp/wp-content/uploads/2015/03/JAGCE_Journal1-213-20.pdf

■学生の反応と具体的な成果

オリジナリティーを捨てたことによって、ビジネスプランコンテストに向けた活動がとてもやりやすくなったと思う。学生は、自分の興味のある企業を選び、その企業について徹底的に学ぶことになった。インターネットなどでの簡単な調査ではなく、足を使った取材を重視することになったのである。社長や従業員、取引先、顧客を訪問して現地で現物に当たり、ナマの声を聞いて、素朴な疑問、問題点を発見し、その解決に向けて行動している。このような活動の具体的な例として、福岡大学病院における待ち時間の問題に取り組んだ「KAIZEN」*6がある。

このような取り組みを通じて、仕事の意味(面白さ)を実感しただけではなく、企業の経営者との信頼関係を構築し、就職に結び付けた学生も少なくない。また、多くのメンター(助言者)を獲得し、さまざまな分野の応援団を獲得することができた。

* 6

具体的な事例としては、福岡大学病院のカイゼンチームを参照されたい。http://www.hop.fukuoka-u.ac.jp/topics/kaizen_project.php

■開かれた「ベンチャー起業論」を目指して

「ベンチャー起業論」には、多くの応援団が生まれるとともに、福岡市内のほかの大学生からも、このような取り組みに参加したいとの希望が寄せられるようになった。また、留学生が就職できなくて困っているとの声に触発されて、留学生の就職問題と地元企業の海外進出という問題を考える「Breakthrough」の活動とそれを支援するNPO組織も地元の経済界の支援の下に始めることになった*7。

成果は徐々に挙がっているものの、まだまだ福岡大学中心の活動になっている。開かれた「ベンチャー起業論」にすることを今後の課題としたい。

* 7

Breakthroughの活動やNPO法人アジアの活動については、以下を参照されたい。<http://breakthrough-asia.com>